

自伝、もしくは、アレゴリーではないもの ジャマイカ・キンケイドの『私の母の自伝』

三浦玲一

「アカになるくらいなら死んだほうがいい、それが私」

ドゥワイト・ガーナーとの対談から

一 はじめに

——「自伝とはなにか」についての小説

ジャマイカ・キンケイド (Janica Kincaid) は、一九四九年、アンティグアに生まれ、自身が十六歳の誕生日に単身ニューヨークに移住、オーベアとして働きながら、七三年に自身の名を Elaine Potter Richardson からジャマイカ・キンケイドに法的に改める。一九七四年からニューヨーク誌のコラムを書き始め、一九七八年にニューヨーク誌に小説家としてデビュー、一九七九年に、当時のニューヨーク誌の名物編集長アレク・ショーンの子、ウィリアム・ショーンと結婚する。彼女の最初の二つの長編小説『アニー・ジョン』(Annie John,

1985) と『ルーシー』(Lucy, 1990) は、各々のタイトル名の少女の成長が一人称で語られる、自伝的小説と呼べるものである。事実の細部において、作者の人生と物語の内容には異同があるが、作者自身もこれを自伝的であると認めている(例えば Ferguson との対談 [76])。とりわけ、アンティグアで育った少女がその島を去りイギリスに向かうまでを描いた前者は(後者は、合衆国でオーベアをする西インド諸島出身のティーンエイジャーの生活を描く)、「カリブ諸島の教養小説の最良の例のひとつ」(Paravisini Gebert 29)と目され、多文化教育が促進された八〇年代後半から九〇年代にかけてのアメリカの中等教育において、頻繁にテキストに用いられた。

キンケイドの三作目の長編小説が、『私の母の自伝』(The

Autobiography of My Mother, 1996) である。この小説は「二〇世紀初頭にドミニカに生まれ、七〇歳の現在までそこに住んでいる女性」、スエラ・クローデット・リチャードソン (Xueda Claudette Richardson) の語りによる一人称小説である。いわゆるディアスポラ小説が自伝的な一人称の語りをその中心的な形式として発展し、同時にそのような形態の小説を書いて成功したキンケイドが、今度は、「自伝」という形式そのものに意識的になることで書いた小説としてこの作品を読み解くことが、本稿の目的である。

スエラの人種的設定——母親がいわゆるカリブ・インディアンであり、父親がスコットランドとアフリカ系の両親の子である——が作者の母のそれと同じであることを考えると、この作品を「もし自身の母が自伝を書いたら」という状況を想像して書いたフィクションであると考えられることは、基本的に、間違っていないようにも思われる。しかし、キンケイドの読者であればよく知っているように、母娘関係の緊張はキンケイドの作品にはほぼ通低したテーマであり、それを反映して、この作品では、スエラが母にならないこと／子供を産むことを拒否することが、大きなテーマとなっている。これが「母の自伝」であるならば、「私を生まなかった母の自伝」なのである。ここにわれわれが見るのは、「子を産むことを拒否した女」の物語が

「母の自伝」とされることで持つ、ほとんどスキャンダラスなまでのテーマの深化である。

キンケイドは登場時から、その独特で優美な文体、単純な言葉の反復を多用した詩的なスタイルを（しばしばカリブ海地域の土俗性と関連付けられながら）評価されてきた²。この特徴は、当然『アニー・ジョン』、『ルーシー』においても印象的に機能しているが、基本的にリアリズム小説と呼べるこれら二作に比較するとき、マジック・リアリズムのもしくは寓話的と呼ばれるのが適当であろう『私の母の自伝』において、この特徴は新たな段階に入ったと考えられるべきだろう。作品が寓話的になることでもたらされるのは、一個人（スエラ／母）の物語が、その一人だけではなく、彼女が属する共同体とその（ポスト）コロニアル状況を象徴するというアレゴリカルな次元の強調であり、前景化である。そして、寓話化されるのが単なる物語ではなく「自伝」であるとき起きているのは、共同体と状況への言及が、常に「私」に回帰する、アイデンティティ（人種、ジェンダー）の問題として設定され且つ問題化されるという事態である。もちろん（すでに『アニー・ジョン』について説明したように）キンケイドの最初のふたつの長編が二〇世紀後半に合衆国で受容されたときには、それはすでに、人種、ジェンダー、もしくはその双方のアイデンティティの語りとして

認識されていた。だが、仮に、前二作において、アイデンティティとは作品を十全に理解するために必要な批評的な道具であったとするなら、『私の母の自伝』という一読理解の難しい構造を持たされたこの小説において、事態はそれとは異なっている。『私の母の自伝』は、「私の母」についての小説であると同時に、「自伝」というジャンル、文学形式についての、それを主題とした小説であると考えられるべきだろう。

このように考えなければならぬもうひとつの理由は、この小説の題、設定に秘められた謎もしくは複雑さには、更にもうひとつの次元があるからである。というのは、「私が生まれたそのときに私の母は死んだ」と始まるこの小説は、一人称の語り手スエラは、決して会うことのなかった自身の母（スエラを作者の母を同一視するのであれば、作者の祖母）を想像し、求め続ける物語となっている。この小説は——ここまで、『私の母の自伝』の「私」を作者としてこの小説の成立を説明してきたとするならば——その「私」を語り手として読む（新批評的な内在的解釈を優先するのであればより正当な）読解も示唆している。実際、この小説の題の意味を説明すると思われる、小説末尾の一節は、このように読める。

私の人生についてのこの説明は、私の人生についてである

と同時に、私の母の人生についてのものとなりました。が、しかし、また同時に、これは、私が見つかった子供達の説明であり、その子供達による私の説明でもあります。〔……〕この説明は、その存在をけっして許されなかった人間の説明であり、私が自身にそうなることを許さなかった人間の説明なのです。(227-28)

「私を語ることは、私の母を語ることであり、私の子供たちを語ることもである」とスエラは言う。その意味で、これは、血統の物語（述べたように、スエラの人種的なアイデンティティはいわゆるハイブリッドなものとして設定されているが）であり、間代的な継承の物語である。だが、その「母」とは「つねにすでに失われた母」であり、その「子」とは「決して生まれることのなかった子」である。継承は継承の欠如であること、アイデンティティはアイデンティティ間の連帯の欠落もしくは拒否であること——ここに、この物語の根底に仕込まれた大きな逆説がある。それが「自伝」となるとき、それは、「私が決してそうなることのなかった私」の「自伝」なのである。

二 エスニシティ概念のイデオロギー性

『プロテスタント・エスニックと資本主義の精神』(The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism, 2002) において、レイ・チョウ (Ray Chow) は、現代のエスニック・マイノリティ/ディアスポラ/ポストコロニアルの言説におけるアイデンティティの価値について、ラディカルに批判的な考察を行った。この本でのチョウの議論の一つの軸は、ミシェル・フーコーの『性の歴史』におけるセクシュアル・アイデンティティの議論を(フーコーのそれ以降の議論と絡ませながら)人種アイデンティティの議論に拡張し、アイデンティティ概念の、先験的に指定される価値ではなく、むしろ統治のための生政治的なテクノロジーとしての性格を強調することである。

チョウのこの議論の根本にあるのは、フーコーのいわゆる「抑圧仮説」批判の卓越した理解である。フーコーが、近代セクシュアリティは、それ自身を明示的に定義する言説から生まれたのではなく、逆に、トラブルとしてのセクシュアリティを禁止し、抑圧し、統御しようとする言説の中から、逆説的にまた遡求的に、その存在を指定された「起源」なのだと論じたとき、チョウは、近代セクシュアリティの言説上の誕生は、性の解放もしくは充足による自己実現に価値をおくことで、生の意味をセクシュアル・アイデンティティの実現とするパラダイムをわれわれの生の奥底に設定する生政治のテクノロジーであり、

このテクノロジー(の一面)は、そのような規範による人口の統治であると指摘する。そして、現代においては、このような統治の技術としてのアイデンティティは、むしろエスニック・アイデンティティへと変容して公汎に機能しているのだと、チョウは言う。

チョウの議論のもうひとつの理論的な軸は、その表題が示すように、ウェーバーの議論に依拠しながらの資本主義との共犯性の批判であり、グローバル化批判である。現代におけるエスニシティという概念は、その理論上の普遍性(全ての人間がエスニシティを持つ)という前提)とその実際の限定性(現実にエスニックの名を付されるのは非白人であるという現実)というイデオロギー的な矛盾の上に成立していると指摘しながら、チョウは、「常に遅れたもの」として認識され「合衆国の全体を代表する理念」には包含されえないエスニシティは(30)、「そのイデオロギー上の役割を、「移民の名」として果たしている」と論じる。ちょうど、アメリカ合衆国が歴史的に誇ったその自己定義「階級なき社会」が、「そこにいるのは、プロレタリアートではなく、黒人だ」と主張することで可能であったように、移民労働者は、使い捨てにされる労働力ではなく、エスニック・アイデンティティの保持者として、マジョリティのアメリカ人と理論的に、文化上、平等な立場におかれるのであり、

且つ、その理論的な平等は、現実の不平等を隠蔽している——例えば、エスニック・マイノリティが「白人のように振る舞う」ことは同化であり、アイデンティティの喪失だが、マジョリティの白人は、エスニック・マイノリティの文化、習慣を自在に、安全に「パフォーム」することができるというように。

以上のような観点から、エスニック・アイデンティティを経済の視点から理解することの必要性を論じるチョウは、アイデンティティを通じた抵抗についての現代の議論が、基本的に、ルカーチの論じたプロレタリアートの抵抗の議論と同型であることを指摘する。「疎外」された労働者に先験的に内在する「人間性」の解放を求めるルカーチの議論における「人間性」が、エスニシティに「洗練」されただけだと。だが、チョウは言う、プロテスタンティズムの精神が資本主義の論理と（対立的どころではなくむしろ）共犯的であることを指摘したウェーバーは、「人間性」へのアビールこそが、資本主義に積極的に参加する勤勉な生産者を生み出すと指摘していたのではないか。実際、これまで分析してきたような布置において、エスニック・アイデンティティの達成を目指すことは、それがアイデンティティのロジックの内部で行われるかぎり、その諸アイデンティティ間の多様性と互いへの寛容を促進することこそあれ、エスニック／非エスニック（白人）という隠されたイデオロギ

ー構造を転倒することはなく、むしろその構造を隠蔽しながら温存し続けるのではないか。こう論じながらチョウは、「グローバル資本の時代におけるエスニックな存在」を、「我抵抗するゆえに我あり」と定義する(47)。個別具体に行われる抵抗の価値をチョウは批判することはないが、チョウのこの定義は、エスニック・アイデンティティのコンセプションを通じた文化的抵抗を、グローバル資本主義のイデオロギー構造の、外部ではなく、一部と認識することを主張している。チョウにとって問題なのは、エスニック・アイデンティティの達成や保護ではなく、そのような欲望を現代の移民に持たせ、内在化させるイデオロギー構造の内実である。エスニシティの内実ではなく、それがどのように誕生させられ、リアルな地位を確保し、どのような政治的な効果に用いられているかである。

三 母のアレゴリー

『私の母の自伝』は、「私が生まれたときに私の母は死に、そうして、私の人生全体を通じて、私と永遠のあいだには、そこに立つものはなにもなかった」(52)と始まり、その段落は、「人生全体を通じて私は断崖の縁に立っている」のであり、私は喪失から壊れやすく、堅く、よるべないものとなったと感じる

ようになり、そう思うことで、自分自身に対する悲しみと恥と憐れみに圧倒されるようになった」(26)と終わる。母の喪失についての言及はこの語りのなかで繰り返され、また、顔を見えない母の足だけが現れる夢を繰り返して見ることが説明されるとき(32)、母の喪失が語り手の、いわばフロイト的な、アイデンティティの一部になっていると考えることは可能だろう。

母の死がこのように人格の一部になっているとは、逆に言えば、母の死は、語り手にとって、単なる一個人の死では当然なく、むしろ象徴的な意味をもっていることを示唆する。引用のように、語り手が自身を「壊れやすく、堅く、よるべないもの」もしくは「自分自身に対する悲しみと恥と憐れみに圧倒され」た存在と定義するとき、例えば、代母として語り手を育てるマ・ユニス(Ma Eunice)について彼女が「私の父が私をその人の許に残したこの女性を私は決して愛するようになることはなかった、この女性は私に対していじわるではなかったが、彼女はそれがどのように可能かを知らなかったので親切になることができなかった——そして多分、私もそれがどのように可能かを知らなかった」(56)と言うとき、母の不在は、語り手とマ・ユニスとの関係の原因ではないにせよ、その関係を可能ばかりでなくむしろ必然的にする基盤となっている。語り手がマ・ユニスを愛

せない理由は、母の不在だと名指されてはいないが、他方、小説の冒頭で、私の性格上の問題は、母の喪失に由来すると説明されているわけである。このような母の性質、いま「象徴的な性質と呼んだものを——これは、当然ながら、作品全体の構造、作品のいわゆるマジック・リアリズム的な性格とも関係するので——ここで、寓話的な性質と呼ぶことにしたい。これは、この語りにおける母の死は、死についてリアスティックな意味が付与されているばかりでなく、作品全体の成立と関係し、作品全体のイデオロギーとも関連した、もうひとつの意味の次元が付与されているという意味である。

母の死の寓話的な意味を言語化するための手がかりは、たとえば、語りが突然寓話的な次元に移行するときにも与えられる。四歳まで言葉を話さなかった語り手は、最初の言葉を「英語——フレンチ・パトワでもなくイングリッシュ・パトワでもなく、明瞭な英語」で言い、「それは驚きであるはずだった。私が話したことではなく、私が英語を、誰が話すのも私は聞いたことがない言語を、話したことは」と語りは続く。そして、語りは、「しかし、誰も気付かなかった」と結論付ける。そこに与えられる説明は、「私が言った最初の言葉が、私が決して愛しなくても好きなにもならない民族の言語であったことは、いま私にとって不思議ではない。そこに私が分ち難く結びつけられて

いる、私の人生におけるすべてのことは、悪いことも良いことも、苦痛の源なのだから」(5) というだけである。

この一節は——語り手が知らないはずの英語を話したという、この語りの寓話的次元において——母の喪失は、寓話的に、母語の死をも意味していると、主人公は生まれながらに、真正な自身の言葉としての母語を失った者として設定されているのだと、容易に解釈されよう。そう考えるときに、テクストが与えるマ・ユーンニスが「親切であるための方法を知らない」ことのも理由もまた、母の喪失の寓話的な次元として理解されることになる。

マ・ユーンニスは冷酷ではなかった。彼女は、自身の子供を扱うとまったく同じように私を扱った——しかし、それは彼女が、自身の子供達に親切だったということではない。このような場所においては、無慈悲さだけが、ただひとつ遺産として引き継がれていくものなのであり、残忍さだけが、しばしば、唯一で無料で手に入るものなのである。私は、彼女を好きではなかったし、私が一度も見たことのない顔を、切望しつづけた〔……〕。(6)

マ・ユーンニスが語り手を愛することができないのは、「この

ような場所」においては「暴力」と「残酷」だけが支配するからである。そして、この語りにおいて、或いは、この語り手の内面世界において、この状況は、寓話的な母の喪失と結びつけられている。彼女の心象風景にとって、この残酷な現実世界は、母の失われた世界なのである。つまり、コロンリアル状況は、この語りのなかで、母の喪失によって象徴される世界として定義されている。

そして、この「暴力」と「残酷」の世界のモチーフは、次の章において、このように深化される。

これらの人々を信頼することはできないと、父は私にたびたび言ったが、それはまさしく、他の子供達の親も、あるいはそのまったく同じときに、彼らの子供達に言っていたのと同じ言葉だった。「これらの人々」とは私達自身なのだ〔……〕。互いを信用しないことは、われわれが互いに対して持つ多くの感情のなかのひとつであり、その感情はみな愛の反対であり、それらはみな、愛の代わりにそこにある。(7)(8)

この島の共同体においては、愛が失われ、相互不信だけが残る。だが、この引用でむしろ重要なのは、その前半部における、「われわれ」は「ああいった人々」だという矛盾の指摘である。

ここには、愛の喪失は、主体の二重化と自己分裂、「私」は私と私の家族が信じる「私」と他者の視線から定義される「ああいった人々」の二面を持つという認識だろう。もちろん、これは、(他者の視線の具体例がその当事者に据えられることでその痛みをさらに増してはいるが) 有名な例をあげれば、フランツ・ファノン以来繰り返されてきた、被差別者の抑圧されたアイデンティティの指摘である。

愛の欠落が母の喪失ゆえであるとするならば、「私」の二重化も、完璧な同一化の対象としての母が予め失われていることの当然の帰結に過ぎないと読めるように、このテクストは成立している。そして、母がそのように理想化されるのはどのようなレトリックを通じてかと考えると、引用の直前、第二章の冒頭が「私の父の家から隣の村にある学校までの長い道のりを、私が自分の手の甲のように覚えたらすぐさま、私があることを後にしなければならなかったことは、もしかすると避け難いことであつたのかもしれない」(47)と始まることの意味にわれわれは気付くだろう。ひとつのレベルにおいては、むしろ、われわれはここに、愛したものはすぐさま引き離されるのが自身の運命だと強迫的に考えている語り手の姿を、母の喪失をトラウマ的に反復してしまうその姿を見ることができよう。しかし、そのしばらく後、語り手が冒頭を繰り返すかたちで「そ

のように良く知るようになった道で、私は、自分の人生のものと甘美な瞬間のいくつかを過ごした」(50)と語るのを見るとき、共同体への不信とは強いコントラストを示すかたちで、語り手は自身が孤独に味わう島の自然を深く愛していることにわれわれは気付く、それに気付くとき、「母」は同時に「母国」とその「母なる自然」を——それは共同体から切り離された「原初の自然」でなければならぬので、せいぜい垣間見られることしかできないものだが——含意していることに気付くだろう。語り手が、自らが愛するものとの関係を、トラウマ的に母との関係(の不在)から類推するとき、彼女の生を取り巻く空間の理想像は、つねに寓話的な母によって表象されることになるのである。

だが、その母は、つねに予め失われている。島の自然と母を連結することを覚えたとき、つぎにわれわれは、第一章で語られ、第二章で繰り返される重要なシーンを理解する。通学路である「私のよく知るようになった道」には渡河部分があり、川の水が増えたある日、いつものように裸でそこを渡ろうとした彼らは、「私たちがいまだかつて見たことがないほど美しく、ヨーロッパ的な意味ではなく、私たちに分かるようなふうに見える、美しい女性」を見、マンゴーに囲まれ、「奇妙だが甘い声」を出す、裸身の彼女に魅せられた仲間の少年が一人、彼女

の差し出す手に向かって歩いて行き、溺れ死ぬことになる(36-37)。この記憶について、語り手はこのように言う。

われわれに関することはすべて、疑いのなかで保持され、われわれ敗北者は、現実ではないものすべて、人間的ではないものすべて、愛なきものすべて、慈愛なきものすべてを、定義するようになる。われわれの経験が、われわれによって解釈されることはない。われわれはその真実を知らないということになる。(……)あの裸の女性の出現は(……)正当に当てはまらぬ者、貧しい者、低き者が信じることなのだ。私はその出現を信じていたし、私はそれをいま信じている。

(37-38)

テクストの最終的な読解において、この幽霊の女と語り手の母が同一人物であると、私は主張する気はない。(後述するが)ここまでの母の寓話的な次元の読解にしても、それらは、可能であるが、強制的ではないという点に、意味のネットワークから「母」の像にそのような意味の奥行きを与えることはできるが、しかし、テクストは最終的にはひとつの意味に単純には還元できないという点にこそ、この「自伝」の構造の意味はある。それを踏まえた上で、しかし、引用部は、この「自伝」の語り

の出発点である母の死を、偶然ではなく必然と理解することを可能にする次元を加えている。植民地状況において、西洋中心的な現実こそが受け入れられる唯一の現実であり、「われわれ」の現実には「ありえないもの」として排除され、削除されるというとき、それを象徴するものは、母であり、母語であり、母国であるものは、つねに予め失われているという認識なのだ。愛するものはつねに失われなければならない。なぜなら、「われわれ」が愛するものは、そもそも現実の領野に存在しえないのだから。

ただし、このように読解するとき注意しなければならないのは、母の喪失は、この小説のナラティブ構造において(のみ)、植民地状況の寓話的な原因となっているが、もちろん、現実の一個人の死は植民地構造の原因ではありえないということ、別言すれば、最初の例で示したように、語り手が愛を失ったことの原因を母の喪失と結びつけるとき、語り手の「暴力」や「残酷」への屈服は、じつは、母の死をエクスキューズとすることで正当化されているということである。一個人の母の死は、この小説の語りの出発点にあるが、寓話的な母の喪失は、この小説が描く植民地状況の象徴ではあっても、原因ではありえない。そして、一人称の語りは、まるで、寓話的な母の死がその原因であるかのような可能性を示唆し続けるのである。

四 呼びかけと自己模倣

フレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) の悪名高き「多国籍資本主義時代の第三世界文学」(“Third-World Literature in the Era of Multinational Capitalism”) を「文化間の関係にはステレオタイプは不可避とする彼の考え」のひとつの表明とし、そこにおいて問題にされるべきは「誰がステレオタイプを流動化させ、誰のステレオタイプが問題となり、普遍化され、誰が不可避免的にステレオタイプ化されゲッター化されるのか」という「権力の問題」(207) としながら、レイ・チョウは、「第三世界文学をナショナル・アレゴリーと見なすジェイムソンの第一世界からの独断の裏面にあるものは、多くのエスニックな批評家たちの側にある、第三世界もしくは非西洋の主体やテキストはエスニックな真実や本質をはっきり示していると論じる傾向である」(116) と論じる。ジェイムソンの主体の位置の問題は考慮されなければならないが、それを一端カッコに入れて考えれば、ジェイムソンがナショナル・アレゴリーと言ったものを、エスニックの批評家たちはエスニック・アイデンティティ(の誇り)の表明として同様に行っているのだというところである。

実際のところ、今日の観点から見ると興味深いのは、かりに「すべての第三世界テキストは必然的にアレゴリカルである」(「それらは、私がナショナル・アレゴリーと呼ぶものとして読まなければならない」というジェイムソンの発言がいかにも犯罪的であったとしても、たとえば、アザーデ・セイハン (Azade Seyhan) が「現代の移民の文学は、ほぼ例外なく、自伝的性質を持っている」(180) と言うように、第三世界(の主体)から第一世界に向けて書かれたテキストが、非常に多くの場合、自己の体験を書くことがそのままその自己の属する共同体の性質を示すという、ナショナル・アレゴリーの性質(の一面)を示しているように思われる点である。言い換えれば、ディアスポラの文学がアイデンティティの表明という枠組のなかで理解されることは、現在、そのようなテキストに関与する作者と読者の双方にほぼ共有されていることであるし、アイデンティティ主義的なテキストとしての自伝という理解は、ジェイムソンの言うナショナル・アレゴリーの性質とほぼ同型である(ジェイムソンが、戦略的本質主義としてのアイデンティティ主義には留保をつけ、文化主義に対しては「文化」は「決してそこで議論が終結する決定的な用語であってはならない」と警告することを除けば [77-78])。まるで、ジェイムソンの「記述的な」第三世界文学の分析が、つまりは転倒して、ディアス

ポラの文学はかくあるべきという診断書として機能してしまっただかのように。

チョウは、ここに、「エスニックな主体が、自己模倣と呼ばれうるようなかたちで、自身についての告白の行為へと呼びかけられる」ところの「強制的模倣主義」(188)を見る。ここで、チョウは、『イデオロギーの崇高な対象』(The Sublime Object of Ideology)においてスラヴォイ・ジジェク(Slavoj Žižek)が、アルチュセールのいう「呼びかけ」は「外傷的で無意味な命令」として現れるからこそ「法」として機能するのだと述べた点を強調し、「呼びかけ」としてのエスニック・アイデンティティが、「外傷的で無意味」であるからこそ、主体はそこへの従属を示す「告白」に参加するのだという逆説を強調する。エスニック・アイデンティティは、無根拠であるからこそ、「私」の一部はそれに適合するが、「私」の他の一部はその基準に十分に届く、適合することのない規範として現れる。そして、むしろそのときこそ、そのような規範を「達成」すること、そのようなアイデンティティを「完成」することこそが目標であるという、アイデンティティ主義的な布置が設定される。アイデンティティ主義のこのような布置の中での、エスニック・アイデンティティの実現としての自己実現こそが、現代のディアスポラ文学における「自伝」の構造であり、「強制的な自己模倣」とチョウが呼ぶものである。

このような観点から見るとき、『私の母の自伝』における、語り手の母の死は、まさしく、「外傷的で無意味な命令」、語り手に、母との合一化においてこそ完全な喜び(ジュイッサンス)が達成されると信じせしめる装置として機能していることが理解されるだろう。母は、その不在において、むしろ強力な同一化を呼びかける装置として機能している。そして、作品の最後では、すでに引用したように、語り手は「私の人生のこの説明は、私の人生の説明であると同時に、私の母の人生の説明となりました」と述べる。これは、(キンケイドにおいてつねにそうであったように)母の不在による母の支配についての物語である。

だが、実際のところ、「母」の人生の詳細については、ひとつの章でその梗概が語られるばかりで、語り手は多くを説明することはしない。そのタイトルにもかかわらず、この作品はむしろ語り手の父についてより多くを語っている。語り手の「内面」において、母への思慕が大きな意味をもっていることは、すでに確認したように、テキストにはっきりと述べられている。だが、彼女の現実の行動において、母はどのように彼女を支配したと言えるのだろうか?—この母を語らないテキストのなかで。

五 「フロイト」対「マルクス」

アイジャズ・アフマド (Aijaz Ahmad) が、「ジェイムソン
の他者性のレトリックと『ナショナル・アレゴリー』」(“Jameson's Rhetoric of Otherness and the National Allegory”) に
おいて、「多国籍資本主義時代の第三世界文学」を批判したとき、
すくなくともその要旨のひとつは、第一世界の知識人が「第三
世界文学」というステレオタイプ化を行うことの暴力性につい
てだった。だが、ここでより重要なのは、強力なステレオタイ
プ化の誘惑のその構造である。

有名な一節はこのようなものである。

私が論じようと思うのは、あらゆる第三世界テキストはアレ
ゴリカルであり、しかも、非常に具体的なかたちでそのような
であるということです。小説のように、はっきりと西洋的な
表象の装置からそれらテキストが誕生している場合でさえ、
あるいは、そういう場合こそ私は言うべきなのかもしれないま
せんが、それらはみな、私がナショナル・アレゴリーと呼び
たいと思うところのものとして読まれるべきだと思います。
まずは、非常に乱暴に図式的な方法で、これを説明しましょ

う。資本主義文化の構成要素のひとつである、西洋のリリア
ストとモダニストの小説の文化は、私的なものと公的なもの、
詩的なものと政治的なもの、我々がセクシュアリティと無意
識の領域と考えるようになったものと、階級、経済的なもの、
世俗的な政治権力の公的な世界と考えるようになったもの、
これらの間の決定的な分裂、言い換えれば、フロイト対マル
クスの分裂から成立しています。(69)

われわれにとって問題になるのは、ジェイムソンが示した公
私の二項対立——詩的なものと政治的なもの、セクシュアリテ
ィ、無意識の領野と階級、経済、政治的権力の公的な領野——
フロイトとマルクスの関係である。たとえば、自らの故郷であ
るアンティグアを訪れ、そのポスト植民地状況の政治的、社会
的腐敗を厳しく批判し、その批判のために一度は出版を断られ
たという『小さな場所』(A Small Place, 1988)と対照させる
とよりはっきりするが、「自伝」である『私の母の自伝』では、
語り手の住む世界の政治的状況、公的な歴史、社会学的な状況
分析がほぼ完全に消去されている。ほぼ語り手の親族と友人し
か登場しないこの小説は、その小説世界を、非常に限定された
かたちで、私的なものとして成立せしめている。より具体的に
言えば、語り手の現在において七十歳であるスエラは二〇世紀初

頭の生まれと想像されるが、世界大戦や舞台であるドミニカの一九七八年の独立も作中には登場しない。このような傾向の先に、語り手であるスエラの名は作中半ばを過ぎて初めて示されるということ、彼女の父や母は基本的に「父」「母」と呼ばれることなどがあり、作品は（ジェイムソンの言う）「フロイト」的傾向を強めている。作品末尾でスエラ自身が「すべて非個人的なものを私は個人的なものとした」と言い、「それは私だけが知る虚飾」(228)だとも言うように、この作品にとって、「自伝」であるとは、「私」の視点から「私」のみに関係する（限定された）世界を描くということであり、そこにおいて、「母」に付与される寓話的な次元は、公的次元、政治的な次元、（ジェイムソンの言う）「マルクス」の次元を代替することで成立しているのである。語り手が生きる悲惨な（ポスト）植民地状況が彼女の母の死から説明されるとき、そこで作品世界から排除されるのは、（ポスト）植民地状況を必然化せしめた歴史である。

語り手は、その自伝において、フロイト的な非歴史的状况を生きている。非歴史的な状況と植民地主義との関係は——たとえば、「未開の地」アフリカを歴史の外に置くことは植民地主義のクリシェだったわけだが——この作品において、語り手の愛人ローランド（Roland）の寓話的説明において述べられる。

後に結婚する相手となるフィリップ（Philip）に抱かれているとき、語り手が思い浮かべているというのが、荷役人足をやっているローランドである。ローランドは、「私には愛がない」と繰り返し述べる語り手が、唯一、愛という言葉を使う対象である。だが、ローランドは結婚しており、（この島の他の多くの男達と同じように）複数の相手に複数の子供を作っている。このことについて、語り手は、「彼の人生は、国の名前ではなく、名前のリストに、いくど月毎の血の流れを止めたかの回数に、還元されている」(175-76)と述べながら、このように言う。

私はローランドを愛していた。彼は男だった。しかし彼はなんだっただろう？ 彼は海を渡りはせず、海を渡った船の底で働いただけだった。どんな山にも彼の名がつけられたことはないし、どんな谷も、どのようなものも、彼の名を冠してはいなかった。「……」彼が求めていたのは、なにかとても日常的な充足だった——ひとりの妻、ひとつの愛以上のなにか（……）。だが、それは、すべて死によってただ終わってしまふのだ、これまで書かれたどのような歴史も、彼を抱きしめることはないのだから。(176-77)

ローランドのセクシュアリティは、帝国主義的な侵略の代替であり、補償である。そして、その代替、補償を語り手が許すのは、彼が歴史の外に構造的に置かれているからである。ここで、ローランドのセクシュアリティは、帝国主義をその「不在の原因」とする記号、言い換えれば、帝国主義の症候となっていると言えよう。

「不在の原因」についてこのように考えるとき、この「自伝」を、自身のアイデンティティの正当性を主張するオーセンティックなテキストとしての「自伝」からむしろ百八十度転倒させて、むしろ、自身がいかに政治的な諸力から多重決定されており、その諸力からセクシュアリティはいかに逃れることができないかを示し、セクシュアリティの政治的な布置をマッピングしたアレゴリーとして読むことが可能になる。この「自伝」の政治的無意識は、グローバルな帝国主義についてのアレゴリーなのである。そして、さらに重要なことは、この転倒において問題になっているのは、アイデンティティという概念の政治的有効性だということだろう。ポストコロナリアル状況における、セクシュアリティを通じて内面化されてしまった、帝国主義の問題を告発するこの小説は、つまりは、アイデンティティという概念の政治的有効性を問題をにしている。

「私は言葉をこえて彼を愛した」(176) という語り手は、なぜ、

どのように、ローランドが彼女にとって魅力的だったのかを説明しない。ただ、「彼の口は、彼の顔という海のなかにある島のようにであった」(166) という描写を繰り返すばかりである。

語り手が初めてローランドを見たとき、ローランドは他の女と話していて、そのとき彼の口は島のようなではなかった。彼の口の動きを見ながら、「私は自分がしていることに無意識な努力をして汗をかきはじめ」(166)、彼が他の女と話し続けるとついに、「彼が話し止めるまで、自分の名を繰り返し叫び」(166)、彼を手に入れる。彼女が彼を手に入れたとき、彼の口は、彼女にとって、島のように見えることになる。

語り手がただ一人愛した男が、(彼と彼女両方の帝国主義の犠牲者としての立場を象徴する) 島のような口を持っていたという寓意は、あまりにもお手軽な比喩であり、同時に、かなり説得力を欠ける比喩でもあるという意味で、不安定である。この不安定さは、彼女が彼を愛するがゆえに彼の口は島のように見えるのか、あるいは、彼の口が島のようなであったから彼女は彼を愛したのかという、口と島の類似と彼女の愛との因果関係についての決定不能性ともつながっている。実際のところ、この不安定さは、この「自伝」をアレゴリーとして読み、その政治的な次元に読者の視線を誘導するための文学的な装置なわけだが、そこに行き着くためには、「私はローランドを愛した」

という主張で埋め尽くされたこの章のなかに挿入された奇妙な一文に気がなくてはならない。同様に、ローランドと初めて会ったときのシーンである——「私は廊下に立っていて、自身のなかに深く沈んでいた、私が私であることの絶望を完全に享受しながら」(76)。

この一文は、その前後から完全に切断されている。この章には、なぜ、どのように、彼女が自身であることに絶望していたのかを説明する記述も、その絶望が彼女とローランドの関係にどのような影響を与えたかについての記述も、一切存在しない。これは、そのようにして、「不在の原因」への入り口である。

この一文に注目するのであれば、語り手は、自身の被抑圧者としての立場に完全に絶望し、絶望のあまりそれを倒錯的に楽しむようにさえなっていたので、同じ被抑圧者であり、被抑圧者として無責任な婚外交渉を重ねるローランドを愛し(植民地状況を再生産し)たのであり、そのような構造ゆえに、彼への愛は彼が「島のような口」を持っているという彼らの共有するアイデンティティを象徴するものによって説明されるのであり、そしてまったく印象的なことに、彼らの愛は、公衆の場でスエラが自身の名を叫び続けるという、まさしくアルチュセールの「呼びかけ」を転倒させた(チョウの言う)自己模倣のジュエチャーによって開始されるわけである。

だが、この小説の模倣する形式は「自伝」である。そして、この「自伝」には、このような読みを(示唆する断片は残されていない)も)正当化する証拠はすべてぬぐい去られている。これが「自伝」であるかぎり、これはアイデンティティの主張なのだ。私の愛は、私のセクシュアリティを經由した以上すべてオーセンティックな愛であり、私はそれを主張する権利を持つのである。

六 帝国主義のアレゴリー

図式的に説明すれば、『私の母の自伝』は、「自伝」が、キンケイドの特徴的な文体を通じて、反復的で且つマジカルなものになっていくにつれて、アレゴリー化されるようになっていく。そして、そのアレゴリーの構図は、基本的にフロイト的なものだが、同時に、そこに、ハイブリッドとしての語り手の設定から、常に「人種」的な構造が付与されることで、「フロイト」は「マルクス」へと、ファミリー・ロマンスは帝国主義の政治的な地勢図の一変奏へと変容していく。

語り手の父と母の前史(語り手が産まれる前の父と母の人生と出会い)を語る第六部は、全体として、帝国主義の権力関係の性化として成立している。滅びゆくもしくは滅んでしまった

人種であるカリブ・インディアンである母と、白人の血を引き継いでいる父との関係は、ここで、権力者と被抑圧者の関係として説明され、権力関係はここでジェンダー化されている——捨て子として育てられた語り手の母もまた、母のない存在なのだという事実とともに。

私の父はいつ彼女を見たのだろう。「……」疑いないことは、彼にとって彼女の美しさは、彼女の顔の特徴のなかにはなかった、彼女の肢体のしなやかさのなかにはなかった（いや私には分からない、私はこれを想像しているだけだ）、彼女の顔の表情に彼を感じる知性のなかにはなかったということだ。そうだ。それは彼女の悲しみのなかに、彼女の弱さのなかに、彼女のなかに染み渡った喪失の感覚のなかに、祖先から血統のその破壊されたかたちのなかに、遺棄されたその姿のなかに、それは実のところ敗北でしかない偽りの人間性のなかにであったに違いない。(200)

父が母を愛したのは、母の美しさゆえではなくその弱さゆえである。そして、そのような意味において、父と母との異性愛は、根本的に、権力関係である。この隠された構造としての権力関係は、語り手が「彼が、彼女の人生において最後の、もう

一人の抵抗できない権力として現れた可能性はある、また同時に、彼女が彼を情熱的に愛した可能性もある」(201-2)と言うとき、これまでのアレゴリーの次元の指摘と同じように、この小説が示す主観的な現実のレベルとは断絶している。ここで指摘されているのは、父と母との関係において、彼らが彼ら自身の主観的な認識においては互いを深く、真正に愛し合っていたとしても、それは権力関係であるという認識である。そして、この認識において、語り手はこのように言う、母の存在を否定しながら——「可哀相なお母さん！ けれども、彼女を知らなかったことが私を悲しくさせると言うことは、まったく正しくないでしょう。ただ、このような人生が存在したということを知る、そのことだけが悲しいのです」(201)。

この苛烈な母の否定は、母個人を否定するというよりもむしろ（あるいはそれと同時に）、母が歩まねばならなかった人生を、そのような人生を避け難いものとして権力関係そのものを否定している。そして、母の人生のこの否定は、不可思議な私たちで、この章結末で突然示される語り手自身の深い絶望とながっている（と読まなければこの作品の全体性は確保されえない）。

子供で、世界は大きく広がっていて、そのなかに、自身の場

所を発見しなくてはなりません。〔……〕ある日、扉を開け、庭に一步踏み出す。しかし、そこに地面はなく、底も、壁も、色もない穴のなかに、あなたは墜落していく。地面のなかにあるその穴の謎は、なぜ自身が墜落していかなくはならないのかという謎に変わっていきます。墜落し、永遠に墜落することに漸く慣れてきたころ、墜落は止まります。しかし、それが止まることは、またひとつの謎なのです。なぜそれが止まったのかについて、答えはないから。ちょうど、なぜあなたが、そもそも、墜落しなければならなかったについても、答えはないように。あなたが何者であるかは、誰にも答えることのできない、あなた自身にも答えることのできない、謎なのです。けれども、なぜそうなのでしょう、なぜそれは謎なのでしょうか！ (202)

世界に場所を発見したのちに突然の覚醒としておきる墜落とはなにか？ 墜落であり、その墜落が終了した後の場所もまた地獄である墜落とはなにか？ その墜落は、「私が誰であるか分からない」という謎」とつながっている。そして、語り手は、ほとんど悲劇的に、「なぜ分からないのか！」と自問自答している。

その謎は、セクシュアリティでありアイデンティティである。

「私が誰であるか」という「謎」は、もちろん、アイデンティティのことと理解されようが、しかし、この作品の文脈において、このアイデンティティの問いはセクシュアリティの問いと連結されている。なぜなら、この章でついに明かされた事実とは、語り手の母もまた、帝国主義側に立つ男と結婚しており、そこにおいてセクシュアリティとは権力関係であるということ、そしてつまり、みずからの愛に背いて帝国主義に敗北するという罪は、ローランドを愛しながらフィリップと結婚をした語り手もまた反復している罪であるということであるからだ。すでに引用したように、作品末尾で語り手は「私の人生のこの説明は、私の人生の説明であると同時に、私の母の人生の説明となりました」と述べることになる。この奇妙な考察は、つまりは、語り手が自身の人生を母の人生の反復と見なしていることを意味している。では、そこで反復されているものはなにか？ それは、帝国主義への屈服としての、愛の不在の証明としての異人種間結婚である。

七 “There Will Be Blood”

最終の第七部で語り手は、自身がいかにかフィリップを愛していないかを繰り返し述べる。(文化的な)帝国主義者であるフ

イリップの妻を、語り手は毒殺に導き(206-7)、フィリップと結婚すると、(むしろ帝国主義への反省から語り手を愛しているように思われる)フィリップを隷属させ、破壊する(217-18, 224)。「われわれはわれわれ自身であることに疲れていた」(221)と語り手が述べるとき、語り手とフィリップは(仮に愛ではないとしても)なにかを共有しているように思われる。しかし、語り手は、「私が結婚したこの男は、勝利者の側に属する」(217)と、帝国主義の効果としての人種(の区別)に拘泥し続ける。第七部で強調されるのは、語り手が「愛していない」フィリップと結婚するとき、彼女が彼を愛していないのも、そして同時に、彼が彼女を愛し、彼女が彼と結婚するのも、帝国主義の効果として定着した人種の布置がセクシュアリティに及ぼす力ゆえであり、彼らの結婚の本質は異人種間の結婚として把握されているということである。それは、「歴史の呪い」(218)と呼ばれる。

つまり、「私の人生のこの説明は、私の人生の説明であると同時に、私の母の人生の説明となりました」と説明するとき、この「自伝」はある意味でメロドラマとなる。私はローランドを愛し、且つ、私がローランドを愛するとは彼と結婚できないことを意味する(より正確には、この作品のアレゴリー構造の内部において、ローランドを愛するが結婚できないのか、ある

いは、ローランドと結婚できないからこそ語り手は彼を愛すると言うのか、どちらなのかは決定できない)とき、それは同時に、私がフィリップと結婚することは即ち私が彼を愛していないことを意味しており、この構造は(その因果関係の無効化のなかで)つねにすでに決められたものとして解消されえない。

この解消不可能性については、同じく第七部で、語り手は、「私が産まれた瞬間に私の母が死んだと言うことは私の人生の中心の主題となりました。私の人生のなかのこの事実をいつ私が最初に知ったのかを思い出すことはできません、私の人生のなかのこの事実を私が知らなかったときのこととも思い出すことはできません」(225)というかたちで、帝国主義の効果としての「愛のない私の世界」という認識が生じた根拠としての母の死が、実証的な事実であるというよりは、「私」を形成する核としてのイデオロギー構造であることを暗示している。愛のない世界は、愛するが結婚できない同じアイデンティティを持つ敗者(ローランド)と、結婚するが愛することのない帝国主義(フィリップ)とに構造化される。語り手は、自分がなぜこのような行動をとるか、説明できない。それは彼女のアイデンティティを構成する彼女のイデオロギーの核であり、説明が不可能でありそれを必要としないことが、それをイデオロギーの核たらしめているのである。もちろん、簡単な答えはある——そ

これは、私のなかを流れる、呪われた母の血ゆえなのだ。主人公が気付き、絶望するのは、私は、私の母の行為を反復しているという認識である。そこにあるのは同一性だ。これはメロドラマ、アイデンティティのメロドラマである。私の行為と母の行為が、同じ反復だと認識されるのは、結婚が個人の行為でなく、人種アイデンティティの組み合わせだと認識されるかぎりにおいてなのだから。

だが、語り手が、次の行で、「そしてそうであっても、同時に、これは私が持たなかった子供たちの説明であり、子供たちによる私の説明でもあるのです」と続けるとき、物語は一瞬にしてメロドラマであることを止める。彼女が示しているのは、私のセクシュアリティは私自身には支配できない私の核であると同時に母からの遺産であるから、私の子がもし存在するのであれば、その子もかならず、同じ帝国主義の悲劇を反映したセクシュアリティを持つのであろうという「歴史の呪い」の確信であり、だからこそ私は子を産むことを拒否するという歴史の拒否である。語り手の結婚の本質がそのハイブリディティであるとき、彼らの結婚はその本質にアイデンティティの論理を持つ。そして、このようにアイデンティティの論理が完遂されたとき、スエラと作者の選択は、アイデンティティを拒否することであった。「私は人種に属することを拒否しました、私はネ

ーションを受け入れることを拒否しました。〔……〕こういう諸アイデンティティが犯す罪を、いま私はいまだかつてないほど知っていますし、それに耐えていくだけの勇気を持たないのです」(206)と彼女が言うのは、そのような意味である。子を持つことを拒否するのは、結婚がアイデンティティの結婚であるとき、子は(生命ではなく)アイデンティティの再生産でしかないからだ——アイデンティティの再生産である子は、「私」と同じ歴史の呪い、呪われたセクシュアリティを持ち、愛のない結婚を繰り返すだろう。

八 結論——生政治とネオリベラリズム

ジェイムソンが、フロイトとマルクスの断絶が、第一世界のモダニズムを、第三世界の不可視化を抑圧する(不可視化されていることを気付かれないようにする)スタイルの誕生だと定式化したのに対して、このように、『私の母の自伝』は、キンケイドのマジック・リアリスティックなスタイルが、フロイト的な「自伝」に人種の言説を接続することで、フロイトにマルクスを接合し、そしてまた同時に、「マルクス」を不可視化させるもの——諸文化をつなぐのは帝国主義的な権力関係ではなく、諸文化は平等に併存すると思ふことを可能たらしめるテク

ノロジーとしてのアイデンティティ——を問題化することで成立している。ローランドが、帝国主義の犠牲者として、歴史に関与する代わりに、婚外子を無責任に作り続けることしかできないのと同じように、この「自伝」において「私」を確立するスエラは、その過程において、彼女をそのような存在とした歴史的事実としての社会構造に言及することができないまま、自身の帝国主義に対する抵抗するための術として、「子を産まないこと」しか持ちえない。違いは、ローランドが歴史から放擲されているのに対し、語り手であるスエラは、自身で歴史を拒否することができるということだけである。

こうして、このテクスト全体の真の「不在の原因」は、「マルクス」、マルクス主義、マルクスが象徴とするものとなる。母の不在が帝国主義一般の問題に見事に同期させられるとき、この寓話的構造のなかで、われわれは、スエラの悲劇が、彼女個人の悲劇ではなく、彼女と同じ状況にあるあらゆるポストコロニアル状況下の女性の悲劇であることを理解する。そして、それは、この「自伝」が排除しているもの、公的な領野における具体的な政治、作者が『小さな場所』において語ったもの、スエラが彼女の母の人生を反復せずにすむことを強制するような状況の変化においてのみ可能なのである。なぜなら、この作品が送るメッセージは、「マルクス」を不可視化するかぎり、

スエラのする「子を産まない」という選択は、必然であり、唯一の選択肢だというものなのだから。語り手がはっきりと語るように、この「自伝」は、ナショナル・アレゴリーになることを拒否した第三世界文学である。だが、ここで、「ナショナル・アレゴリーになることの拒否」とは、自身の語りが共同体の寓話になることを拒否したのではなくて、自身の語り、自身の語るセクシュアリティは、まさしく共同体の寓話であるからこそ、それが再生産されることを拒否しようと試みることを意味している。それは、自己模倣を強制し、自然化するようなアイデンティティ主義の批判である。アイデンティティの論理のこのような批判は、その外部である、階級、経済、政治的権力の公的な領野からしかされえないだろう。それは、この作品世界の外部にある。

だが、最後に、ジェイムソンの議論から離れて、われわれはこの議論を、ポストコロニアルイズムの現在の状況に関連づけるべきかもしれない。「自伝」がなす、このマルクスからフロイトへの移行、公的な領野の問題がすべて「私」の私的で且つオーセンティックな経験の問題へと翻訳されていく移行、帝国主義の傷跡が個人のセクシュアリティの問題としてこそ現れる移行、政治体制としてのコロニアルイズムが（形式上）終焉し、「文化」の問題としての帝国主義の傷跡が問題となるポストコロ

ロニアル状況——この移行は、公的な領野の問題としての「政治」概念が失効し、われわれの生存こそが真の政治の問題として登場する、政治からネオリベラルな生政治への移行の問題である。ローランドとスエラが持ち、行使しようとしているのは、彼らの生政治的な権利である。彼らはそれを行使する。だが、「私の母は子供産むべきではないと思った」という作者によって書かれた、真の悲劇としての『私の母の自伝』は、その生政治的な権力はなにも意味しないことを証明している。この物語は、生政治的な権利が、権利の喪失でしかない状況を提示して

いる。『私の母の自伝』が示す「声」は、純粹に悲劇的な声ではない。それは、この世界において——この作品世界においてのみならず、第三世界文学の特権的な文学形式は、オーセンティックな自身の声を提示する「自伝」だと考える、われわれの住む世界の全体において——問題なのは、身体ではなく、個人の自由を十全に保証するという口実から市場至上主義を推進するネオベラリズムでもなく、公的な社会体制全体を再編するヴィジョンだと主張している——おそらく、作者自身の無意識の領域から。

註

(一) 発行直後のドゥワイト・ガーナー (Dwight Garner) のインタヴューで、作者は「この本の核は、私自身の母が子供を持つべきではなかったという省察から生まれている」と述べている。また別の後のキム・マクラーリン (Kim McLarin) のインタヴューでは、「この小説は、私の母の時代の女性の人生を描いた

という意味においてのみ母と関係している」とも述べている。端的には、彼女の作品を論じた多くの書評に見られるが、そのような態度を端的に示した論文としては、「EIP」。今日では、当然ながら、「カリブ性」という概念そのものの構築性への批判や、「カリブ性」を仮構すること

による、その地域がそもそも持つ多様性を抑圧することへの批判もなされている。これについては、たとえば、Cohan。『私の母の自伝』におけるカリブ性については、Morris。キンケイドと合衆国のヘゲモニーとの共犯性については、King。

- Ahmad, Aliza. "Jameson's Rhetoric of Otherness and the 'National Allegory.'" *Social Text* 17 (Autumn, 1987): 3-25.
- Chow, Rey. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. New York: Columbia UP, 2002.
- Cobham, Rhonda. "Mwen na rien, Msièu! Jamaica Kincaid and the Problem of Creole Ghosts" *Callaloo* 25.3 (2002): 868-884.
- Ferguson, Moria. "A Lot of Memory: An Interview with Jamaica Kincaid." *Kenson Review* 16.1 (1994): 163-88.
- Garner, Dwight. "Jamaica Kincaid." *Salon*, Nov 8, 1995. <http://www.salon.com/05/features/kincaid.html> (accessed November, 2008).
- Jameson, Fredric. "Third-World Literature in the Era of Multinational Capitalism." *Social Text* 15 (Autumn, 1986): 65-88.
- . "Modernism and Imperialism." Terry Eagleton, Fredric Jameson, and Edward W. Said. *Nationalism, Colonialism, and Literature*. Intro. Seamus Deane. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990. 32-66.
- . *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. Durham: Duke UP, 1991.
- Kincaid, Jamaica. *The Autobiography of My Mother*. New York: Farrar Straus Giroux, 1996.
- King, Jane. "A Small Place Writes Back" *Callaloo* 25.3 (2002): 885-909.
- McLarin, Kim. "An Interview with Jamaica Kincaid." *Black Issues Book Review* (July-August 2002): 34.
- Morris, Kathryn E. "Jamaica Kincaid's Voracious Bodies: Engendering Carib (bean) Woman" *Callaloo* 25.3 (2002): 954-968.
- Paravisini-Gebert, Lizabeth. *Jamaica Kincaid: A Critical Companion*. Critical Companions to Popular Contemporary Writers. Westport, CT: Greenwood P, 1999.
- Sayhen, Azade. "Ethnic Selves/Ethnic Signs: Invention of Self, Space, and Genealogy in Immigrant Writing" *Culture/Contexture: Explorations in Anthropology and Literary Studies*. Ed. E. Valentine Daniel and Jeffrey M. Peck. Berkeley: U of California P, 1996. 175-94.
- Szeman, Imre. "Who's Afraid of National Allegory?: Jameson, Literary Criticism, Globalization." *South Atlantic Quarterly* 100.3 (Summer 2001): 803-27.
- Tiffin, Helen. "Cold Hearts and (Foreign) Tongues: Reiteration and the Reclamation of the Female body in the Works of Edna Brodber and Jamaica Kincaid" *Callaloo* 16.4 (Fall 1993): 909-21.
- Žižek, Slavoj. *The Sublime Object of Ideology*. London: Verso, 1989.